

指定校番号	28020	学級活動	児童会・生徒会活動	学校行事	○	別紙様式
-------	-------	------	-----------	------	---	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立亀山小学校	校長	宮本 眞弥子	生徒指導主事	長尾 圭一郎
-----	-----------	----	--------	--------	--------

取組事例名 5年生『力を合わせて、全員で（福王寺）遠足をクリアしよう！！』

取組のねらい『キーワード 現状把握 + 一步踏み出す』

第5学年は、学年目標を『5（5分前行動）go（自ら行動する）合（力を合わせる）』と決めて、全ての行事の根底にそれを当てはめながら、様々な活動をクリアしてきた。その中で、5月上旬の「福王寺遠足」では、7月の中旬に行われる野外活動での「男三瓶登山」を意識させ、「全員で登山をクリアするための一歩である」と位置づけた。そのために、それぞれが、去年からの自分を振り返り、あと一歩足りないところを考えた。（現状把握）その後、それをふまえて、この遠足でどう頑張るか、参加の仕方も含めて、一步踏み出すための「チャレンジ遠足」とした。

取組の具体的内容『キーワード 違いを知る + 全員でクリア』

5月上旬の「福王寺遠足」は、7月の中旬に行われる野外活動での「男三瓶登山をクリアするための一歩である」と考え、①自分の力（現状把握）を見つめ直し、②一步踏み出す遠足（チャレンジ）という位置づけとなった。さらに、それらを発表する中で、登ることや登校すらもしんどい児童（仲間）がいることを知り（違いを知る）、③力を合わせて、クラス全員で福王寺遠足をクリアしようということとなった。

取組の課題・創意工夫『キーワード 綿密な事前連携（保護者、ふれあいほか）』

第5学年の中には、教室に入れず、（昨年は「ふれあい教室」すら入れなかったが）「ふれあい教室」で授業を受けている児童もいた。そこで、担任や学年団、生徒指導主事は、その児童も含めて、いかに全員でクリアできるかを当該児童及びその保護者、ふれあいの先生たちと何度も連携を行った。そして、当該児童に様々なプランを提示し、スモールステップで目標をクリアしていきつつ、「本人が何とか自分で頑張る」というよい雰囲気遠足前日を終えることができた。

取組の成果（効果）『キーワード 限界を超える』

ところが「遠足当日」になると、当該児童は、お腹が痛くなり、何度もトイレに行き、「お母さんと行く」と言い出した。しかし、事前にそのような事態も想定しておいたので、母親と作戦通り、当該児童を頑張らせることができ、「しんどい」「はく」を連発しながらもなんとか福王寺登頂を達成することができた。本人曰く、「人生で一番しんどかった。」「限界を5回以上超えた。」と言っていたが、帰りの歩きや母親と会った時には、とてもいい顔をし、達成感に満ちあふれていた。



また、当該児童のがんばりの影響で他の「ふれあい教室」の児童も遠足に参加できるなど、学年団の教員が上手に広報してくれたことで第5学年の他の児童にもよい影響（それぞれの限界を超える）があった。

今後の展開『キーワード 個のがんばり→集団での助け合い』

第5学年の学年団の教員は、厳しく「個でのがんばり」を要求し、それに児童たちもしっかりと応えてきた。そして、次の「野外活動の男三瓶登山」では、それにプラスして、「集団での助け合い」の必要性を説き、学年全体で頑張ることができた。結果的には、全員が山頂達成という訳ではないが、それぞれの目標を何とか達成し、それに対する他の児童の助け合いなども見られるようになってきた。

10月に実施した運動会の集団演技などでもその成果が見られ、学年団としての成長も感じることもできた。



他校へのアドバイス『キーワード 様々な特別活動を仕組む』

小学校の良い所は、様々な行事や活動がたくさんある所だと思う。クラスには、不登校だけでなく、様々な状況の児童が在籍しているが、その様々な児童をその活動のどこで生かすことができるかという視点で見ることができれば、普通の遠足でも、本人にとっては大きな達成感をもつことができると感じる。(実際に、その当該児童は、昨年、観客席からの参加であった運動会にも、児童席で参加し、いくらかの種目と係活動に参加することができた。) また、様々な児童に「できた」という達成感を持たせるために、我々教員は、より積極的に様々な特別活動を仕組んでいくという視点がとても大切であり、そのステップこそがセンスであり、だからこそ、日頃の子どもの見取りや保護者との連携が大切になってくるのではないかと感じる。